

「修報」発刊によせて

学校法人昌平黌 理事長
田 久 孝 翁

去る平成元年六月二十二日、本学の一隅に大成殿を建立して孔子像をはじめ四配像を安置してから本年六月二十二日は数えて十年であり、十回目の大成至聖孔子祭を行う。丁度記念すべき年を迎えて此の度「修報」が発刊される運びと相成りましたことは、誠に御同慶の至りであります。

省みれば昭和五十二年、当時本学の名誉学長山岡荘八先生の記念碑「行儀以達其道」を建立して、是れを本学教育永世の規範とすると定めて以来、論語によるこの字義を建学の精神とする本学伝来の歴史的価値観を、如何にして学生の心の中に留め置くべきかを考えた未に思い当たったのが「大成殿」の建立でありました。

而ち、学生諸君が自らの目で見、更に己の心を捕らえることが出来るもの、それが大成殿とそこに安置される孔子像であるという信念のもとに、ささやかではあったが大成殿を建立し、孔子像と共に四配像を安置することになったのであります。その際、物事に習って魂を入魂する祭りごとが必要であることから、孔子七十七代の直裔孔徳成と共に曾子七十四代直裔曾憲緯、孟子七十四代の直裔孟祥基、それぞれのご子孫をお迎えして入魂の挙式を行なったその日が六月二十二日であったことから、以来本学の孔子祭はこの日にと定めたわけであります。さらにこのことを記念するとともに宏く孔子の教えというものを一般社会の人々に理解してもらえよう求めて行くことも、地域社会の大学として必須の課題であるということから、「論語素読会」を開催することと致しました。

次は講師の問題であります。先ず地元の一人、斯の道の大家の鈴木一氏と大学の二人、矢崎浩之、谷口典子両氏の合わせて三人の先生方によって毎週第二、三、四土曜日の午後一時から二時半の間、教材としては仮名論語（成人教学研究所・伊與田覚先生、大阪）を教本として素読会が開催されてから前述の如く今年は十年目となり、延べ一五〇〇名の受講生を数えると共に、最近では一般の受講生に交じって学生達の数も増えてきたということは喜ばしい限りであります。たまたま最近の世相を思い見る時、人々に求められる「心」の問題が大きな社会問題としてクローズアップされているが、その背景に問われていることは教育の在り方であり、人間一人一人の精神的指導教育が今日の課題であることに思いを致すとき果せるかな、ここに論語素読教室の存在と役割とが評価される時代の到来であることを新たな確信として憚らないのが最近の心境であります。そこに「昌平黌精神」と言われる所以があるのであります。孔子生誕のかた二五五〇有余年の間、不遍的思想を踏まえたその精神のすべてが真理を貫く哲学を以ており、それによって人倫を正している

のが論語であり、儒学の精神であると申し上げることが出来ます。

世に四大聖人といわれる人々が居ります。一に孔子であり、二、三、四とソクラテス、釈迦、キリストと続いていく（年代順）が、この聖人達の残したすべての格言（教え）が今日の社会に普く君臨している。これが世紀以前、我等人間社会に求められてきた精神であり、ここに森羅万象等しく求められた大自然の鉄則を敬愛する先人の心を知ることが出来ます。「論語百編自ずからその意を悟る」に示されているように、読まざる論語は知るよしもないのであります。

「三人寄れば必ず師あり」の格言も、常に自分本意になりがちな大人にならぬよう、人々に対する転ばぬさきの杖であることも知らねばなりません。孔子は「人（にん）を見て法を説け」とも言っているように、すべて言葉の意味するものは相手の聞き方一つで変わって来る。そこで問われることは語り上手に聞き上手。これなどは正に「論語百編自ずからその意を悟る」君子を思わせるセリフの一つでもあります。

そこで忘れてはならないことは、儒学は東洋を代表する思相を代弁する哲学であると言うことであります。我が国に到来してより十七世紀近く、現在からは四世紀前に遡る徳川幕府（創始者家康公）によって国学と定められて以来、庶民の学問として親しまれ、江戸時代の寺子屋文化として「仁義礼知信」によって定義づけられた人々の生活様式は、今日に至るも朽ちることなく、誠に水か空気の如くして社会のすみずみにまで溶けこみ、さらにこの慣習の一片は戦前戦後の激変によっていささか歪められたきらいはあるが、幸いのこと根絶するには至って居ない。

これからでも遅くはない。儒教は今、東南アジアは勿論、世界のすみずみにまで儒教ルネッサンスを合い言葉に、世界平和の棋士たらんとしております。経済問題一つ取っても「経世済民」、民を助け世を起こすことは孔子思想の根幹であることを申し上げまして、「修報」発刊の挨拶といたします。